

令和4年度第2回生野区区政会議まちの未来部会

1 開催日時

令和4年11月1日（火） 19時00分～20時35分

2 開催場所

生野区役所6階604・605会議室

3 出席者

（区政会議委員）7名

船方委員、宮崎委員、川本委員、永松委員、北口（英）委員、廣川委員、山納委員

（生野区役所）8名

筋原生野区長、櫻井副区長、小原企画総務課長、木村地域まちづくり課長、川楠まちづくり推進担当課長、林都市整備局生野南部事務所長、杉本区政推進担当課長、上田企画総務課長代理

4 委員に意見を求めた事項

（1）生野区将来ビジョン等について

資料1 生野区将来ビジョン2026（ベース案）

（まちの未来部会関連施策：41～47ページ）

参考資料1 令和4年度生野区の取組みの中間振り返りについて

（まちの未来部会：抜粋分）

参考資料2 （仮称）生野区地域福祉ビジョン2026（素案骨子）

参考資料3 前回いただいたご意見一覧（全体会：令和4年6月14日）

（2）その他

5 会議内容

○杉本区政推進担当課長

それでは、皆様、お待たせしました。お時間になりましたので、ただいまから令和4年度第2回生野区区政会議まちの未来部会を始めさせていただきます。

委員の皆様、ご多用のところご出席いただきまして、ありがとうございます。

私、事務局の生野区役所企画総務課、杉本と申します。着座にて失礼します。よろしくお願ひします。

初めに、本日の会議の出席状況についてご報告します。

本日の会議、委員定数9名に対しまして7名のご出席がありまして、定数の2分の1以上の出席ということで、有効に成立してございます。そして、本日の傍聴者は0名となっております。

区政会議に関する本市の規則によりまして、本日出席されました、委員の方のお名前、発言内容等は公開されます。

事務局で会議録を作成しまして、後日、区役所のホームページ等で公開させていただきますので、録音や撮影等についてご了承のほどお願い申し上げます。

次に、本日の区政会議の趣旨と配付資料についてご説明いたします。

まず、本日のまちの未来部会、こちら生野区の目指す、まちの将来像としての生野区将来ビジョンというのがあります、その中で、主にまちの魅力や地域活性の分野について、委員の皆様にご意見、ご議論いただきたいと考えてございます。

続きまして、本日の資料でございますが、左肩に当日用とございます、令和4年度第2回生野区区政会議まちの未来部会の次第をご覧ください。本日の会議資料が載っております。資料がおそろいではない場合はお持ちいたします。

まず、事前に送付をしております資料ですが、資料1といたしまして、生野区将来ビジョンベース案というA4横の資料になってございます。

続きまして、参考資料1としまして、令和4年度生野区運営方針中間振り返り、まちの未来部会抜粋版という資料がございます。こちら今年度の生野区の取組について、中間的に振り返りを行ったものになってございます。

続きまして、参考資料2としまして、(仮称)生野区地域福祉ビジョン(素案骨子)というA4横の資料もございます。

そして、参考資料3として、前回いただいたご意見一覧(全体会：令和4年度6月14日)がございます。

それと、あと、チラシもいくつか置かせていただいております、区民の皆様にお勧めしたい大阪市の関連のスマホアプリの一覧を載せたA4のチラシがございます。そして、もう一つは、A3のチラシで、御幸森小学校の跡地活用としまして、このたびプレオープンしました「いくのパーク」の紹介と併せて、先日行われました10月30日、そして今週11月3日にも行いますが、プレオープンイベントも掲載してございますので、またご覧ください。資料は以上でございます。

それでは、事務局からの報告は以上になってございますので、これからの議事進行については川本部会長のほうによろしく申し上げます。

○川本部会長

こんばんは。コロナ禍でございます。皆さん方、それぞれいろんな行事等も各地域で形を変えて、自粛したり、あるいは中止になったりというようなことでございます。

今、世間では、カボチャのお化けが幅を利かす祭りがありまして、韓国では大変な事故が起こっております。そんな中で、私たちが今後、生野区の未来のまちづくりということに対して、皆さん方と協議をしていただくことになろうかと思えます。一人でも多くの方がいろんな意見を出していただいて、それを今後の生野区のまちづくりに生かしておきたいと思えますので、今日は1日よろしくお願いを申し上げます。

それでは、開催に当たりまして、筋原区長からのご挨拶をお願いします。

○筋原区長

皆さん、こんばんは。生野区長の筋原です。

本日は、お仕事やご家庭のご用事でお忙しい中、お集まりをいただきまして誠に

ありがとうございます。

4月から生野区の区長に就任をさせていただきまして、半年余り過ぎたところでございます。日々、生野区に住んで、そしてこの生野区のまちの優しさや人情や、また熱気に本当に感じ入りながら生活をし、また働かせていただいているところでございます。

本日は、未来の生野区をどのようなまちにしていくのか、また、目指すまちにするために、これから4年間、どのように区政を進めていくのか、その方向性を示しました将来ビジョンを作成するに当たりまして、委員の皆様のご意見をいただきたいと思っております。

生野区を暮らしても面白い、そして、遊んでも面白い、働いても面白いまちにするために、引き続き、区政に取り組んでまいりたいと思っておりますので、本日どうぞよろしくお願いを申し上げます。ありがとうございます。

○川本部会長

ありがとうございました。

それでは、会議の次第に沿いまして、議事の1、生野区の将来ビジョンについての区役所からの説明をお願いいたします。

○上田企画総務課長代理

生野区役所の企画総務課課長代理の上田です。どうぞよろしくお願いいたします。まず初めに、将来ビジョンというものがどういったものなのか、ということをご説明をさせていただきます。

前のほうのモニターに記載させていただいているんですけども、将来ビジョンというもの、行政区の1つである生野区の今後進むべき方向性を示す道しるべのようなものになっています。

本市では、自立した区長マネジメントによる区政運営を図るべく、各区で将来ビジョンを策定しています。

生野区では、平成24年度末に策定し、平成29年度に改訂を行っております。前回の改訂から既に4年が経っておりまして、社会を取り巻く情勢も大きく変わっております。改めて現状を見詰め、課題を把握した上で、これからの区政の進むべき方向性を再認識し、取り組んでいこうということで、新しいビジョンについて考えているところです。

本日は、皆様にビジョンのベース案となる案をお示しして、まちの将来像に向けた課題認識を共有し、共に考えていただければと、本日議題に上げさせていただいた次第でございます。

スケジュールにつきましては、この区政会議の後ですけれども、ビジョンの素案を取りまとめ、来年1月頃にパブリックコメントとして一般の方へご意見の募集を行った上、改めて区政会議にてお示しした上で、新年度までに完成という運びで考えております。

なお、区政会議で皆さんから定期的にご意見をいただいております、区の運営方針というものは、このビジョンの実現に向けた年度ごとの取組をまとめたものとなっております。本日は時間の関係で割愛させていただきますが、参考資料として、

今年度の取組の中間時点での振り返りをつけさせていただいておりますので、ご参考いただければと思います。

それでは、資料1に基づいてご説明をさせていただきます。お手元の資料、もしくはスクリーンのほうをご覧ください。まず1つ目ですが、生野区ってどんなまちだろうっていうことで、まちの特徴についてです。5ページをご覧ください。

一つ目に思い浮かぶのが、グローバルなまちであるということで、5人に1人が外国籍の方であり、外国人人口割合も全国の都市部で最も高く、約60もの国籍の方が暮らしているまちです。

続いて、6ページです。ものづくりのまちということが言えるのではないかと思います。製造業の事業者数は市内24区で最も多く、日本のものづくり産業の発展を支えてきた、高度な技術を持つ事業所もたくさんあります。

続いて、7ページになります。住民同士の助け合いがあるまちということが考えられます。地域団体やボランティアグループによる活動が活発で、区内にはNPO法人が50も存在しているという状況にあります。

続いて、生野区を取り巻く情勢についてですが、10ページをご覧ください。こちら人口動態で見ていくと、全国同様に生野区でも少子化、高齢化が進み、1960年の23万7,000人をピークにして、人口減少が続いている状態です。23年後の2045年には10万人を割り込むと予想されております。

続いて、13ページをご覧ください。

人口減少・高齢化に伴う本市への影響としまして、経済、市民生活、医療・福祉、まちづくりの各分野で様々な影響があるということで示されております。

このような想定される事態を踏まえた上で、生野区の目指すまちの姿というものを、現行のビジョンを継承したもので大きく3つにまとめておりますのが、16ページになります。

まず、1つ目ですが、誰もが普段の暮らしから、災害などの非常時でも安全・安心を身近に感じて暮らせるまちということです。これは、区民の生命・身体に関わることで、まちづくりとして基盤となるものです。

2つ目が、生野区にたくさんの方が訪れ、住んで、住み続けたいと思えるような、にぎわいとろどり豊かな魅力あるまちとなっていることです。

そして、3つ目ですが、子育てする環境が整い、未来あるこどもが生き生きと学び、成長していく、子育てに優しく、教育に強いまちということです。

この3つの目指すまちの姿の実現については、まだ道半ばであり、引き続き実現に向けて施策を進めていきたいと考えておりますので、よろしくお願ひします。

ここからですが、とりわけその目指す姿、将来像の実現に向けての前提となる基本的な理念、考え方について、区長の筋原からご説明させていただきます。

○筋原区長

区長の筋原でございます。それでは、生野区の区政の基本理念、異和共生という考え方を基本理念としておりますので、その説明をさせていただきます。18ページをご覧ください。

異和共生、異なったままで、和やかに、共に生きるという考え方でございます。多文化共生というときに、ほかの自治体などでは、よく多文化共生の説明に、壁を取り払って一緒にやりましょうというようなことを書いてる場合がありますが、私は、生野区長の前に港区長を5年、そして大正区長を7年務めさせていただいておりますが、大正区長のときに、大正区というのは、人口の4分の1が沖縄出身者とそのご家族というまちなんですけど、当時、沖縄文化と大阪文化の激しいぶつかり合いとあつれきが正直ありまして、そのときに、違う考え方の中で一緒にどう共生するかというところで、たどり着いた考え方が異和共生でございます。

壁と壁を取り払って一緒にやりましょうとよく言うんですけど、実際にそれをやりますと、強いほうが弱いほうを飲み込んでしまうという併合という状態になってしまって、なかなか共生の状態にならなかったという経験があります。ですので、異和共生の考え方というのは、あえて壁を残したまま、お互いの壁を立てたまま、その壁にお互い半歩ずつでも踏み出して、壁と壁の間、隙間で少しずつ一緒にできることを増やしていこうという考え方です。そして、その前提になるのは、お互いの壁を支えているのは、そのもととなるところにお互いの文化や歴史がありますので、その文化や歴史をリスペクトして、尊重して、大切にすることが前提になるという考え方でございます。

19ページをご覧ください。

もう一つ、ずっと手法として大切にしておりますのが、公民地域連携という手法を大切に区政を進めてきております。

20ページをご覧ください。

公民地域連携なんですけども、やはり今の時代、行政だけで全てのことをするというのは無理で、行政資源にも限りがございます。

一方で、まちには多様な専門家の方もおられ、また担い手の方もおられて、様々な資源がございますので、視点を広げまして、一方で、私ども行政は、社会的な信用であるとか、あるいは行政間の調整をするのは得意であるというような強みもございますので、行政と、民間の組織と、そして地域の皆さん、それぞれの強みを生かした連携で、そして、お互いが対等な関係で、共通の目標に向かって、一緒に前に向かって進んでいくというのが異和共生による持続可能なまちづくりと考えております。

次に、21ページをご覧ください。私は、公民地域連携のまちづくりを4つのステージに分けて考えております。これは大正区のと看から、いろいろな施策をして、それがなかなかうまくいかなくて挫折したこともありますが、一方で、成果が出た部分もありますので、自分なりに実践をしていく中でこういう形でやるとまちを元気にできるんじゃないかという仮説で、こういう4つのステージを考えております。

まず、①の分野が、従来型のコミュニティが縮小する段階で衰退期と、そして②の分野が、まちがイメージチェンジをするという回復期と、③の分野が、まちが新しい価値を生み出すリノベーションをするという再変革期と、そして④の分野が、次の世代にそれが継承されて、新たなコミュニティがつけられていく、再生していくということで再生期という形で整理をしております。

22ページをご覧ください。

それを図で表したのがこのマトリクスでございます。左右の矢印が左に行くほど、行政がお金を出して助成をしているという状態。右に行くほど、行政のお金じゃなくて、自立して収益を生み出して、事業ができているという状態です。上下の矢印ですけれど、上に行く矢印が、にぎわい創出、活性化の方向です。下の矢印が、相互扶助、助け合いという矢印です。

この4つの分野の①、左下、これは大阪市の中で一番昔からある、地域活動の代表的な形です。行政から、まちづくり協議会に助成金が出ております、準行政的ないろいろな助け合い、見守りの地域活動をやっていたら、ボランティアですけれども、活動費の助成は出ていると。例えばでいうと、今の時期でいうと敬老会であるとか、また、盆踊りなんかはコミュニティの育成ということでは相互扶助の要素がございます。また、高齢者の食事サービスであるとか、あるいはこどもたちの通学路の見守りであるとか、また、防災訓練でありますとか、防犯の啓発活動をやるとか、そういう相互扶助、助け合いの活動ですが、これは非常に大切な活動です。本当にこれで、まちのコミュニティが成り立っているという形で、これがなければ本当にまちは成り立たないぐらいの大切な活動で、生野区は地域の活動も非常に活発で、きちんと世代交代もされながら、今継続してできているんですが、これは私が大正区長になったとき、大正区は24区で一番人口が少なくなっていて、今も一番少ないんですけど、非常に衰退傾向にある状態でした。まちが衰退モードになると、この①の分野で活動する若い方が入ってこなくなるわけですよ。それで、何十年も同じご高齢の方が活動をされていて、さすがに限界が来るわけですよ。このままではいよいよもう活動ができなくなってくるというところまで、衰退エリアではなくなってしまっている。これではいけないということで、何か新しいことをしようということで、②の分野の、まちのイメージチェンジをしよう、イベントをやろうというような声が上がったりします。大正区でも花火大会を実際やったりもしました。

それから、私が大正区長をやったときはちょうど10年前で、沖縄本土復帰40周年の年だったので、この間も「ちむどんどん」という朝ドラをやっていましたが、10年前も「純と愛」という朝ドラをやって、大正区が舞台地だったんですね。ですので、NHKが非常に力を入れてくれて、大きなイベントもすごく打ってくれました。当時、すごくイベント自体は大成功して、何万人という人が来ていて、大正区もメディアに100回以上出て、非常に注目を浴びたんですけど、私、そのときすごいショックだったのは、人口減少と人口流出には全く何の効果もなかったんですね。だから、やっぱりまちが変わるっていうのは、日々の膨大なエネルギーが要るので、年に1回とか数回の大イベントでは、エネルギーの総量としては不足しているんですね。日常生活が面白くなるという状態になっていかないと、やっぱりまちは変わっていかないとこのことを痛感いたしました。

そして、どうしたらいいのかっていうことを悩みながら、③の分野で、空き家が生野区もたくさんありますけど、大正区もありましたので、空き家を改修して、リノベーションをして、それで、面白いお店であるとか、面白い場所をつくるというようなことをやったり、あるいは、水辺の河川敷に特区を取って、船が着いたり、

飲食できるTUGBOAT_TAI SHOという商業施設をつくったりと、水辺のリノベーションというようなことをやったりということで。これはやっぱり創業になるわけですね。日常を変えるには、それが毎日続いていかないといけないので、事業としてやらないといけないということになりますので、事業、創業ということで、そういうことをやってるうちに、少しずつ人口の流出の人数も減っていき、自分が大正区長を出る7年目にしてやっと人口流入が流出を上回って、流入増に転換をいたしました。

そういう状態になると、やっぱり面白いことをする大人が集まってくるので、次に大事なものは、④分野なんですけど、それを次世代のこどもたちにもそういう面白い仕事、面白い生き方を伝えるというキャリア教育、ここはキャリア教育という意味で教育と書いているんですけど、どちらかというところ、この面白さを継承して、そしてまちの隅々までその面白さを拡充していくという感じなんです。そういう形になれば、地域のまちの中に人もお金も循環して、そして、多様なNPOであったり、いろいろな社会の課題を解決しようという、そういう団体さんも生まれてきてという状態になっていって、そこからまた新たな地域活動の担い手をまた一巡して、①分野のところに入ってきて、そして、一番大切なこの①分野が、コミュニティ育成の相互扶助の活動が続けることができると、そういう循環になるんだと思っています。

そして、前のスクリーンに出ていますけど、生野区はこの下半分が非常に元気なんですよね。地域活動も元気に世代交代もしながらもされておりまして、NPO、社会福祉法人等は50以上もあって、非常にたくさんあります。大正区は1つか2つしかなかったですからね。ですので、生野区も人口減少傾向で、衰退しているということでご心配の声をよく聞きますけど、私の4月からの実感で言うと、あんまり衰退感はまだないんです。本当に衰退傾向にあったベイエリアから来た身からすると。ですので、今いろいろなことをやれば、まだまだ間に合うと思っています。まだまだ元気に再生して発展していく、そういうポテンシャルが生野区には力強くあると思っています。

ただ、もし、このまま何もせずに、このまま推移していけば、多分15年ぐらいたったら、本当に衰退した状態にだんだんとなっていくんじゃないかなと思いますので、やっぱり万博に向けて、今いろいろなチャレンジをするということは大事だと思っています。

次の23ページで、もう少し補足をしますと、この③分野のところの拡大なんですけど、これはNPOがこの分野では活躍されたり、まちづくりをするプロフェッショナルが活躍されたりしますが、最近の傾向としては、いわゆるビジネスプロフェッショナル、大手企業も含めて、今まで利益を出すということを主眼として考えてこられた企業体、これは今までお客さんのニーズに対応することで利益を上げてきたと思うんですが、やっぱり最近、そのお客さんのニーズというのが非常に多様化して、またすごいスピードで変わるので、ここを追いかけてもなかなか利益が得られないと。やはりここに気がついた企業さんは、社会課題を解決するという方向に行く、そういう企業が増えつつあります。これはまさにSDGsにもつながっていくわけですが、社会課題を解決する、まさにその部分で利益も生み出すと

いう会社はだんだんまちづくりにも参画をしてきますので、それはイノベーションプロフェッショナルになっていくんだろうとっておきまして、そういうところともしっかりと連携をしていくということも一方では大事だと思っております。

そして、公民地域連携における行政の役割というのは、22ページに戻ってください。①分野では、行政というのは助成金を出すというのが非常に大切な役割になるわけですが、③分野の創業というところになると、助成金を出すというよりも、日本で初めてとか、世界で初めてのよう新しいチャレンジをする民間の方や個人や、そういう方が新しいチャレンジができるだけ制約なく実現できる環境づくり、規制緩和であるとか、そういうことをするのが行政の大切な仕事になってくると思っております。

次に、24ページをご覧ください。

そして、目指すまちにということでは、これは前任の山口区長から引き継いだコンセプトで、やはり生野区は、「居場所と持ち場のあるまちへ」が大切だと思っております、25ページをご覧ください。

私は、まちづくりを家づくりに例えることが多いんですけども、家というのは、まず基礎があります。その基礎に当たるのは、安全・安心の取組だと思っております。防災や防犯はじめ、安全・安心の取組がまずあって、そして、家の1階部分に当たるのが、やはり地域の経済の活性化だと思うんですね。1階に経済の活性化があって、そして、2階、3階に子育てや教育や地域福祉と、こういうものが乗っていると思っております。大阪市内でも、今、平家の家を建ててもなかなか人は入ってくれないと思うんですけど、まちも一緒に、やっぱり2階、3階の子育て支援、教育、地域福祉、ここが充実していないと人は住んでくれないと思うんですよ。ただ、そのためには、1階の経済の活性化もなければ、そもそも家として、まちとして成り立たないと思っておりますので、両方をしっかりとする必要があると思っております。こういう形になってこそ、資源や担い手、人やお金がまちの中に循環をしまして、そして、誰もが居場所と持ち場のあるまちへと実現していくと考えております。基本的な考え方についてご説明をさせていただきました。

引き続きまして、各施策の方向性についてご説明をさせていただきます。

○上田企画総務課長代理

それでは、具体的な施策の方向性について、まちの未来部会に関わる部分についてご説明させていただきます。

本日の部会では、にぎわいといろどり豊かな魅力あるまちというものについてですが、皆さんにご意見を伺いたいと思っております。資料では42ページとなります。

まず、リノベーション×まちづくりということで、生野区のまちに魅力的な人・富・場が集積し、その流れがまた新たな産業を創出し、好循環している状態を目指します。

44ページをご覧ください。こちらのほうに施策の展開の方向性について、5つの項目が掲げられています。

1つ目が、万博を契機としたまちの活性化を図るため、地域活動や産業振興など、各分野の専門家や地域で活動する住民同士をつなぐネットワークづくりや情報発信、

イベント開催などに取り組んでまいります。また、生野区を訪れた方が区内を巡る仕組みとして、シェアサイクルの社会実験などにも取り組んでまいります。

2つ目ですが、高い技術を持つ生野区内のものづくり企業を知ってもらうというふうな情報発信や、区内の企業と新たなアイデアを持つベンチャー企業とをつなぐ取組なども進め、産業振興の活性化や新たな担い手の確保と技術の継承を努めてまいります。

次に、3つ目ですが、学校再編により廃校となった学校施設を民間事業者のノウハウを生かし、新たなにぎわい創出のまちや、まちの活性化につながるような取組を進めてまいります。

次、4つ目ですが、空き家や空きスペースが多いという特徴を生かして、改修などの利活用によるにぎわいの場づくりに取組を支援していきたいと思っております。

さらに、5つ目となりますが、持続可能な地域公共交通の推進として、BRTやAIオンデマンドバスの認知向上や利用促進に向けた運行事業者との連携の取組を進めてまいりたいと思っております。

このように、眠っているまちの魅力を見つけ、発掘して、魅力的なものに育て上げられるような取組を進めていきたいと考えております。

これらに関する目安とする指標としてなんですけれども、新たな指標として、生野区のまちに地域のにぎわいや活気が出てきたと回答した区民アンケートの割合ですが、令和8年度末までに50%以上にすることを目指していきたいと考えております。

次に、45ページになります。

まちの魅力づくりと並んで、生野区のまちを区内外に広報していく取組も必要となりますので、シティプロモーションの取組を進めていきたいと考えております。

47ページをご覧ください。

そのために、区民のわがまち意識を育てる取組や生野区の魅力を国内だけでなく世界の人々にも認知してもらえるように、企業や地域と連携して、戦略的なプロモーションに取り組んでいきます。目安とする指標についてですが、生野区のまちに愛着を感じ、これからも住み続けたいと回答した方の割合を、令和3年度44.7%だったものを令和8年度までに60%以上にしたいと考えております。

2つ目の指標として、新規としてですが、前年度に比べて、若年層の転出が減少する状態や、転入が増加している状態を目指すということを考えております。

以上がこれからの区の将来ビジョンについての説明となります。

なお、本日も説明は省略いたしますが、本日配付しました参考資料の2、生野区地域福祉ビジョンについては、これからの生野区の地域福祉を考えていく計画となっております。主にくらしの安全・安心部会でご意見をいただいております。

それでは、皆様、忌憚のないご意見をいただければと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○川本部長

それでは、これから委員の皆さん方の意見をいただいて、活発に交換をしていきたいと思っておりますが、限られた時間でございますので、より円滑に意見交換をしてい

ただくように、よろしく願いをいたします。

この会議を学識委員であります、山納委員さんにファシリテーターをお願いしますので、よろしく願いいたします。

○山納委員

山納でございます。よろしく願いいたします。

時間は8時20分までと聞いています。1人、五、六分ぐらいしゃべる時間があるというイメージでしょうか。今日のお題が、生野区の将来ビジョンをまとめる、それに当たっての意見をということでございます。どうしようかなと思いましたが、最初に、学識委員という立場を使って、僕が自分の意見をしゃべっていいでしょうか。皆さんから五、六分時間を取ってしゃべっていただきますが、僕にはこれがどう見えるのかという話からさせていただいていいでしょうか。

16ページに、目指すまちの姿というのが書かれています。安全・安心を身近に感じて暮らせるまち、にぎわいといろどり豊かな魅力あるまち、子育てに優しく教育に強いまちにしていこうと、そして、異和共生というビジョンを示していただいています。

こういうものを見たときに、何を考えるのかというと、一番当事者といいますか、これ、本当にやらないと済まない人は誰なんだろうと、そういう人がいると多分エンジンになるんですね。その人は誰なんでしょう。生野区に今住んでいる人、ずっと長く住んできた人なのか、移住でやってきた人なのか、またはUターンで帰ってきた人なのかみたいなこと、誰かが担うということなんだろうなと思っています。

そして、公民地域連携という言葉が出てきました。20ページを見たほうがいいですね。

行政だけで限界があると書いてあります。多様な資源・担い手・専門家が存在するし潜在すると。公、そして民、そして地域の強みを生かすと書いています。地域は何かイメージできますね。今日集まっていたらの方々は、まちづくり協議会のそれぞれの地域で関わっておられる方が多いと思います。地域に根差した活動をしている人がいるであろう。もう一つ、民って書いてあります。民って誰ってことですよね。先ほどの22ページの図を使って、筋原区長がお話しされた中に、生野区は地域団体、NPO、社会福祉法人が元気ということがありました。これは地域であろうと。民って誰でしょう。そして、この図の上には、イメージチェンジ

(回復期)、リノベーション(再変革期)とあります。そして、次のページに、まちづくりのプロフェッショナル、ビジネスのプロフェッショナル、イノベーションプロフェッショナルという言葉が23ページに出てきます。どうもこの民間企業家、事業者でそういうことができる優れた人っていうものが、このモデルには必要というふうに書かれているように見えます。それは誰なんだろうということですね。今ここにいる人たちがそのプレーヤー、公、民、地域であるのか、さらに、こういう人を招き入れることによってこれは実現するビジョンなのか、また、今、生野区にいないけれど、もっと招き入れることによって、これはさらに加速していくっていうビジョンになっているんだろうかということ、これを見ながら、それ、どうやったら本当に実現するんだろうという話として、僕は聞いたということ先を共有

させて頂きました。

ちょっと時間を置いて、皆さん既に考えてきていただいているものと思うんですが、この生野区の将来ビジョン、これが描かれて、本当に実現していくために、当事者、本当にやる人、やらないといけない人、誰なんだろう、エンジン積んでる人って誰なんだろう、プロフェッショナルっていう言葉が出てきましたが、プロフェッショナルってどういう人なんだろうということ、それを見つけないと、多分これ絵に描いた餅に終わります。そうしないために、本当に動く、実現していくビジョンにするために何が要るのだろうという問いかけを、皆さんにまずさせて頂きました。それに答えていただいてもいいですし、いや、そんなこと急に言われても困りますと、もう十分考えてきたシナリオがあるから読ませてくださいっていうこともあるかと思います。その辺のご意見をお伺いしてもよろしいでしょうか。

では、お願いしたいと思います。どなたからでも結構です。まだ僕は3分ぐらいしか使わなかったと思うので、あと40分ぐらいあります。1人6分ぐらいしゃべれますが、どなたからでも、いかがでしょうか。今の話を受けなくてもいいですよ、受けていただいても。

永松委員、お願いいたします。

○永松副部長

今のお話とどれだけリンクするかは分からないんですが、この間、プレオープンイベントのいくつ多文化クロッシングフェス2022に、私は遊びに行った側なんですが、ものすごくよかったんです。

チラシを見たときは、いろんな国の料理が食べられるよみたいなのと、こういうワークショップもあるよみたいなのを書いてあって、いろんな料理が食べれて、しかもお酒が出るイベントってなかなか珍しいなと思って、私も地域で活動してたりもして知り合いも多いですから、知り合いが店を出してたりとか、イベントに関わってるというのもあって、ふらっと1人で見に行ったらものすごくよくて、これ来なかった人、もったいなかったなとすごい思ったんです。

今回これ自体は初めてのイベントだったと思うんですけど、The 生野という濃さがすごく出ていて、しかも従来の地域の生野の雰囲気とは違う新しい生野を凝縮した感じっていうのが出ていて、今後、生野区の魅力になるだろうなというのはすごく感じたので、やっぱりそういう場所が、大きな箱ができたっていうことはとても大きいことだなというのを感じましたし、これからあそこでそういうイベントがどんどん増えていくことも、とても楽しみです、特に今回は初回だったので、割と実行した人たち、またそれに近い人たちぐらいがワーッと行ったと思うんです。あとは、たまたまちょっと興味があった人ぐらい。でも、これ口コミで、絶対にどんどんよさが広まっていくので、結果的にこのイメージチェンジの2分野のところ、こういうところにつながっていくんだろうなという、私はただ遊びに行っただけの人なんですけど、手応えというか、明るい未来を感じたというのが、ステージもすごかったですし、何か行ったら、「生野、生野」っていうラップが聴こえてきたと思ったら、その次は西アフリカのダンスかなんかが始まって、「わあ、すごいな」って思ったら、アヒランを歌い始めて、わちゃくちゃだったのがすごいよかった

ので、今は狭い御幸森小学校のあのスペースの中だけでしたけど、生野全体に広がっていくといいなというのはすごく思いましたし、あそこに集まった人たちがとてもエネルギーのある人たちがきゅっと来ていたので、ああいう人たちがこれからのまちづくりのキーマンにもなっていくんだらうなというのは思いました。

○山納委員

ありがとうございました。

担い手となるであろう人がもうそこに集まってたって感じですね。

○永松副部長

そうですね。

○山納委員

ありがとうございます。

では、ほかの方、いかがでしょう。

では、宮崎委員、お願いいたします。

○宮崎委員

御幸森の宮崎です。おととい、いくのコーライズパークはものすごい人でしたが、近くの人じゃなくてみんな遠くから来てるんです。足の不便な中、よく来てくれたなと思います。御幸森って、桃谷から歩いて15分ぐらい、鶴橋からゆっくり歩いたら20分ぐらいかかるような足の便の悪いところに、タクシーで来られてる人もいましたけど、天気もよかったこともあってすごいにぎわいでした。特に、今言われてたように、ちょっと見慣れないインドネシアやネパールの人だとか、いろんな人が来られていました。だけど、地元の人が少なかったです。いくのコーライズパークとしてやるからということで、地元の者にしたらもうちょっと地元広報せえよって思っていました。一切なかったからね。

いろんな問題があるけど、この間からほかの部会も出させてもらってたけど、人口が24%減ってるってすごいでしょう。それで空き家が多くて、年少者が24区中23位で、高齢者が24区中3位で、どうしようもないなと。生野区に、御幸森は特別かもしれないけど、今、コリアタウンがにぎやかになってるから、異文化交流が盛んになってきた関係といろんなことがあって来たい人はもう十分来てくれるんじゃないかなと思うけど、ますますこれから人気が高まってきてくれたらもっと来てくれるから、来たい人はもういいんじゃないかなと思うけどね。

それよりも、前に区長が言っていたが、住みたい、住み続けたい人、子育てを生野区でしてくれる人、これ何も生野区だけが希望しているわけではなくて、環状線の外側、みんなそうだからね。それで、なおかつ生野区に来てもらうということはものすごく難しい。よっぽどいいイメージがあるか、明るいイメージというか、そういうイメージが生野区に出てきたら、もしかしたら生野区がよくなるかもしれないと思うんだけど、今のままでは人口減少が続くと思う。人口減、市内中心部に人口が集中して、それで子育て所帯が減るからこどもが少ない、こどもが少なくなるから学校を閉鎖しなければならないというような悪循環だから。下手したら、今再編してもらっているけど、この再編では終わらないかも。もっとこどもが減ったらもっと学校も減らさなければいけないからね。だから、僕が強いて学校を減

らすんじゃないくて、学校へ来てもらうように何とかならないかというのが僕の思いだったんだけどね。けれど、ますます人口減、特に若い人の人口減が進んだら、学校の必要度が少なくなってくるから、今、生野区に住みたい、住み続ける人を増やさなといけない。

それで生野区に、僕らたまに引っ越した人に「何で引っ越してきてん」と聞いたら、「利便性の割には家が安かったから引っ越してんけど、こんな外国人のいるところが日本にあるって知らなかった」と言っていました。ちょっと聞いたら、生野区にこの2年間大型マンションが建ってないんです。そのマンションが建ってないのが、なぜかと言ったら、入居者がいないから建たないんであって、所帯にこどもを抱えた人が何百所帯も募集しても来ないという。だから家が先じゃなくて、生野区に住みたいと言う人のほうが先やからね。生野区に住みたい、住み続けたいと言う若い人をこっちに向ける方法が何かあればなと思う。空き家が多いんだったら空き家を利用して、家賃をもっと特別補助するとかいうようなことや、生野区のいいところというのは、周りに私立中学校がたくさんあるから、生野区の小学校みんなに私立中学受験の学級をつくるとか。認知症になっても安心して暮らせる生野区っていうのもいいかしのれないけど、これだと年寄りばかり増えるからね。だから今、こどもの第3の居場所、これから問題になっていくらしいね。第3の居場所、学校以外、学校と家庭以外の居場所がつかれないかなということ、生野区内には地域の会館が19地域みんなあるんです。今、老人憩いの家って名前にはなっていますが、利用度も下がってきているし、そこをこどもの第3の居場所で、放課後、皆そこへ寄ってきてくれたらよくなるんじゃないかな、利用できるんじゃないかなと思うんだけどね。建物が20ほどあるからね。それで、昔は地域の人のお葬式とかにも使えて便利よかったけど、そういうのも利用がなくなってきたから、だから思い切ったことをするならこどもの居場所に切替えられないかなと思うんだけどね。

○山納委員

ありがとうございます。

では、廣川さん。

○廣川委員

お疲れさまです。こんにちは。

先ほどのお話を聞いてて、ごもっともだと。言われてたのが、文言いろいろと書かれているけど、もっと具体的にしていけないよねと。書いてある文言が、対象は誰なのかっていうふうになってて、絵に描いた餅をどうやって実現に向けていくかっていう具体的な施策っていったところをこの場の皆さんで考えられたらもっと面白くなって、こんなんやったらどうかな、あんなんやったらどうかなっていう話合いのほうが面白いのかなと。それでそれを拾い上げて、「一回やってみようぜ」みたいな形になったほうが何かちょっとわくわくするなど。実際のところ、大人たちが面白くわくわくしてないとこどもたちは集まってこない。面白い魅力的なまちっていったところは、大人たちが何かやってる、チャレンジしていたりとかする背中とっていったところが重要なんじゃないかなと。教育の基本形ってそこなのかなと。学ぶってまねることから始まるから、まねする大人がもっと増え

ていったらいいのかなって聞いてて思いました。

あと、永松委員が言っていたクロッシングフェスは、俺もすごく面白かった。ただ、自分は出店していたので、ただただ激しく時間が過ぎたっていうような感じなんですけど。生野らしいおばあちゃんも、もう10回ぐらい来て、「あんた、うちの物件使い、おばあちゃんが、これ売ったら売れるから」みたいな。それで計算までして、住所と電話番号渡されて、それで気づいたら何か怒られ始めて、「あんたには誠意がない」って、誠意って何っていうような、ああいうのがやっぱりちょっと自分は人間くさいところが好きなんですけど。

具体的などころの話をしますと、地方だったりとかで人の流動をつくるっていうのがやっぱり難しいんですよね。そうなったときに、今回って具体的な見える化ができていて、維新派って、自分はずっとバックパッカーとか旅していたんですけど、やっぱりちょっとサブカルチャーとかアーティストさんの限界ではちょっと有名なんですよ。その人が舞台をつくる。またクロワッサンサーカスっていうちょっと奇抜な、サーカスっていう文言だけでわくわくするような。あれは維新派さんがパンと企画されたのかな。あれはすごい戦略のところで立てられている、そこに何か行政も乗っかったらいいんじゃないのかなっていう。人の流動があるところに行政がどう広告をするかみたいな、逆のパターン。行政がつくるところ、行政が何か補助するっていうよりも、まちに来てもらうために何か、「生野のまちってこういうまちだよ」といったところのビラや、何か施策の内容のビラをまく場っていうところがあっても面白かったのかなって。

実際のところかというと、地方に行ったときに、生野区以上に人の流出や人口減少が進んで、そうなったときに何をしたらいいのかっていったら、人の流動をつくれるイベントだったりとかに乗っかるべきだなと思ってて。例えば、フジロックとかって結構ブランディングがもうできてるんです。自然が大好きな人たちが集まるってなったときに、「うちのまちって自然豊かだよ、空き家もいっぱいあるよ、サポートするよ」っていう紙があったら、そのまちに対する意識レベルが一個上がると思うんです。こういうまちがあって、自然豊かで、フジロックにも協賛、行政が協賛するっていうのは難しいかもしれないですけど、そこで広告をするってすごく理にかなってるのかなと。

そこで重要なのが、生野がどういうブランディングでいくのかっていう、多世代もそうだし、多文化交流といったところが魅力あるところだから、どう見える化していく、どうアプローチする種なのかなといったところで、面白い、何か突拍子もないというか、もうダイバーシティをつくれるのはこのまちぐらいしかないんじゃないかなって思ってるんですけど、やっぱり分断というか、先ほどおっしゃっていた壁のある中でって、それはそれで多分いいと思うんですけど、もっと交流して、新しい何か国と国間を共有するような活動も生まれていけば面白くなるのかなっていうふうに思っています。

あと、教育のところかというと、先ほど区長さんがおっしゃっていた、教える教育もあれば協力し合いながら育むっていう協育もあって、共に育むっていう共育もあると思っていて、自分はそれをちょっと今、形化したいなと思っているんですけど、

この3つの教育っていったところを具体化する、協力し合いながら育むっていうのは、コミュニティ育児みたいな、やっぱり先輩の出産した方たちとの連携できるような新しい、「子育ては不安いっぱいじゃないよ」っていう伝える場所っていったところがこの教育なのかと。協力し合いながら共に育むって、こういう会、まちのつくるっていったところに対して、ガンガン子どもたちを巻き込みながら、もっと何か楽しい会の中で、大人たちってこうやってつくり上げていくんだよって見える背中のところまで学ぶ教育もあれば。あと教えるほうの教育も重要なのかなと。これもやっぱりグローバルっていったところで、ダイバーシティ、海外の人たちがたくさんいる、ここの交流も深めた中で、先にあるところは、生野から出てくる新しい企業がグローバルな世界に対抗できるとか、そういう企業が生まれるっていう、このステップアップみたいな感じをちょっと絵を描いてアプローチしてみるっていうことが重要なのかなと自分は思いました。あと楽しんでやっていけたらなって、この時間が有意義になれば最高です。

○山納委員

ありがとうございます。

では、続きまして、いかがでしょうか。

では、船方委員、お願いいたします。

○船方委員

まちのイメージチェンジってとっても大事だと思っていて、生野区って昔ながらの家が多いので、見た目も暗かったりとか、空き家も多いので、廃墟みたいになったりとかしてちょっと廃れてきている感じとか。子育て世代というか、私はもう子育て終わりましたけれども、子育てをする側からすると、やっぱりきれいなまちで、なおかつ小学校や中学校にアクセスがいいっていうのはやっぱり選択条件に入ってくるんです。

私、北鶴橋に住んでいるんですけど、北鶴橋小学校は4年後になくなりますよね。小学校は選択制になっているんですけど、徒歩で行くっていうのが多分大前提の条件になっていると思う。そうすると徒歩でこどもが行ける距離って限られるので、どうしても行く学校が限定されてしまうというところからすると、ここの学校に行ったらもうちょっとこどものためにいいんじゃないかなという親は行かせられなかったりとかするので、こどもの力を伸ばせないっていう状況がつくってしまうんじゃないかなというふうに思うんです。だから教育もすごく大事なんですけど。あと教育もあって、なおかつ、そのまちが何かいろんなものが、面白いものがたくさんあるっていうのはすごく魅力のあるものになると思うので。

私の友達が長崎県に東京から移住した子がいるんですけど、その子は長崎県の東彼杵町というところで、3年間の有期の役所の職員として、まちおこしプロジェクト隊として行って、3年間そこに住んで、そこで商売をするというのが条件になったらしいんですけど、最終的にそこでゲストハウスを運営するようになって、今そのゲストハウスをやり出して3年目になってらっしゃるんですね。そういう何か、やっぱり生野区も空き家がたくさんあるんだったら、空き家をきれいにして、起業できる人を募集して呼んで、そこで起業を目標としてやってもらうために

補助をすると、いろんな人がたくさん入ってきて、まちの活性化にもつながるんじゃないかなというふうに思いました。

○山納委員

ありがとうございます。

では、まだの方、お願いいたします。

北口委員、お願いいたします。

○北口（英）委員

皆さん、こんばんは。北口でございます。

私の住んでいる地域、巽東のほうなんですけども、ちょっと変わった地域でいろいろ変わっているんです。というのも、巽東という中に巽東小学校、新生野中学校、大阪わかば高校、支援学校という大きな箱が存在しています。地域でいうと、土地が学校に使われている分だけ、人がちょっと少ない。その少ない上に、今とんでもなく高齢化が進んで、もう歯止めがかからない状況になっています。現状でいうと、今出た若い人は、70代、80代の息子さんがいらっしゃる人もたくさんいらっしゃるんですけども、結局ほかの地域に行かれて、ほぼ帰ってこない現状。

その中でも、細々と祭りがありますので、夏祭り、秋祭りとなったら、その息子さん、娘さんがたまに、さらにお子さん、俗に言うお孫さんを連れて来られるケースがある。そういうときの祭りはある程度華やかには見えるんですけども、それが終わると、もう引いたようにひと気がなくなるんですよね。特に祭りの期間で言うと、13、14、15日ってだんじりを出してるんですけども、うちの地域は土日とか関係なくて、日にちが限定なんです。13、14、15日。15日が巽神社の宮入りというのは皆さん知られてるので、小学校から中学校、高校生くらいの子まで結構来てるんですが、そのお宮入りが終わってしまうと方々にどっか散ってしまって、結局だんじりをしてるメンバーがいつものおっさんばかりという、そこにも高齢化という厳しい現状が付きまとっているんですけども。

それを打開するために、今、私も青年団を離れていますけども、青年団の者に「あちこち友達とか声かけて若い子を連れてきてくれ」っていう話はする一方で、私は私で町内の方に「息子さんに祭りの日だけでも戻ってくれ」というふうな話はするんですが、それでも現状は人は帰ってこない、祭りのとき以外は帰ってこないというのが現状なんですよね。ある意味、祭りというのはちょっといいアイテムでもあります。実際、今年は生野区でいうと生野まつり、いろんな都合でだんじりの部分はなくなりましたが、それでもすごい動員はできるとは聞いておりますけども、もし来年からまたできるのあれば、一つのまちの再生というか、まちを盛り上げるアイテムの一つとしては、かなり有効なものでもありますし、そんな一気に何十台というだんじりが見れる機会というのは他でやってることではないと思いますし、何十年も続いてますので、できるものなら従来どおりで、もし来年からでもできたら一つのアイテムとしてはいいかなとは思っています。

○山納委員

ありがとうございます。

では、川本部会長、お願いいたします。

○川本部会長

こういう地域の担い手は誰なのかというのが一番やっぱり大事な話なんですよね。

私の地域は、たまたま生野区でも青少年指導員の代表だったり、若い人たちがたくさんいて、その若い人たちが基本全部、立案して行事をやっているのが現状です。そのときに、僕はもう若い人に任せようと、私たちの時代は過ぎたと。まず私は高齢者ですからね。高齢者っていうのは柔軟性と創造性がすごく狭くなってしまっている。今日も見たらいろんな計画がいっぱいありました。これやっぱり担い手は若い人がやるべきだと。

そういう意味では、若い人を中心とした地域づくりというのが大事なのかなと思って、そういうことを言うとうちの若いメンバーが、「川本さん、そんなん言うたら寂しいやん」と言う。僕は孤独って好きなんですよ。何でかっていうと、孤独っていうのは自分の時間がいっぱい持てるんですよ。自分の好きなことができる。誰かと関わっていたり誰かとやっていたら、その分全部そっちへ時間が取られたり気を遣ったりするわけでしょう。だから、年取ったら孤独ってすばらしいなと思っています。ただし、「ほっとかんといてね」って、「おまえはもう要らん」と言わないでと。これは孤立ですよ。孤立はしたくないけども、孤独は年取ったときに豊かな自分の老後を暮らす一番いいものを与えられたと思っています。そういう意味で、地域では、そろそろ私、引退だな。なぜかと言うと、引退することによって、若い人が出てくるんですよ。若い人が責任持ってくれるんですよね。私たちがやっていると、最終的には責任は取ってくれるだろうということになってしまって、責任感がなくなってしまうんですね。そういう意味で、もうそろそろ私たちは自分の時間を楽しみたいと、年を取ると。そうやることによって若い人が出てくる、活性化してくる。私たちがやるとね、先ほど言いましたように、本当に視野が狭い。つい、「おまえらそんなことやっていいんか」、「今までの伝統がどうのこうの」と言う。そうすると若い人が、「うるさいな、もうやめとこか」ということになるので、若い人にお任せをする時代が必要なのかな、そういう世代交代かなと思っています。

○山納委員

ありがとうございました。

一巡をいたしました。まだちょっと時間はあるのですが、僕も委員としての意見を言わせていただこうと思います。

空き家の活用って言葉が出てきます。空き家って、皆さん、空き家があります、活用できますかっていう問題だと思うんですね。リノベーションって書いてあります。リノベーションってできますか、大作業ですよ、設計作業ですよ、それ誰ができるんでしょうかっていうときに、多分建築をかじってる人、設計ができる人、不動産触れる人が多分プレーヤーになりますね、当事者として。僕も今、芦屋のほうで空き家もらってリノベーションをしているんですが、途方に暮れます。これどうやったら水が止まるんだろうということだったり、どうやったらモルタル塗れるんだろうって途方に暮れるんですが、多分できる人っているんですね。地元にいるかもしれないし、よそから来る人かもしれないと。

いろんなローカルな地域の活性化の担い手を見ているときに、建築家とかデザイナーってすごい注目されてきています。特にデザイナーさんとかって、もう大都会にしかない仕事だったはずなのに、どんどんローカルに行っていると。さっきUターンとかIターンという言葉を使ったかな、その地元に戻ってくる、そこにやってくる人たちが、これまで地域の人たちだけだったら解けなかった問題をデザインを通じて解くとか。デザインも発注されて、絵を描く、デザインするというだけじゃなくて、一から祭りに参加して、関係性をつくることからやって、その地域の問題を解いていく、つくったものを売るというところまで関わるというデザイナーさんが、地域ですごく活躍をするようになってきています。

都会にいて、部分しか見えない仕事をするデザイナーさんって結構メンタルやられてという人って多いんですけど、そんな人たちが地方に自分たちの活路を見出し始めている。この人たちがまちづくりの担い手になるっていうのをすごくよく見ます。

一例を出します。福井県鯖江市というところに行ったデザイナーさんがいます。新山さんという方です。彼は、地場産業が鯖江にはあります。眼鏡以外にも漆とか和紙とか打ち刃物とかいくつもあるのですが、その地場産業を再興するために、RENEWというイベントをやっているんですね。これはオープンファクトリーイベントです。個々の工房に「この2日間来てください」、「工房見てください」、「ワークショップ体験してください」、「この商品買ってください」というイベントを鯖江の駅から10キロぐらい離れたところでやってます。これに3万人来ます。工房の横に新しくショップつくったというのが31できています。

これまで工房って、要はOEM、請負でこんなものを匿名で作ってましたという人が、こんなことが作れるんだから自分のブランドを小さく作って、そこで売ることになりました。その自分ブランドのお店が31できてるんですね。ということが起こります。

その仕掛け人が一デザイナー、彼は鯖江の河和田にデザイン事務所作っています。すごくもう全国から注目される存在になってる。まちづくりってこんな人が担っていたりするんですね、さっきのイノベーションっていうことでいうと、この人が来るかどうかということにかなり大きく関わっている。その人が何とかしないといけないと思って、すごく力を発揮する。その結果、本当にすごいことが起きるといことが全国各地で起こっています。

この日曜日に皆さんが見られた、御幸森小学校跡も多分そういうものの始まりだと思って見えています。

本当にもう悲惨なぐらい人がいなくなっている、高齢化が進んでるという声がありましたけれど、そこにぴたっと入って、それができる人が来るかどうか本当にこれからにかかっているんだろうなと。この資料の中の、好循環に回していくための2分野、3分野というのは決定的に重要なんですが、この担い手がどこにいるのか分からないと。うちに、生野区に全く来てくれないかもしれないということとの戦いになってくるんだと思います。その魅力というのをどうつくっていくのかとか、さっき言いました、それが担えるプロフェッショナルというのはやはりいる。その

人たちをどう見出すのか、どう組めるのかということは考えないといけないなど思っています。

もう一つ、多文化共生という話が出ました。韓国、朝鮮の人がいたり、ベトナムの人が増えてるということですよね。この委員の中に韓国籍の方おられました。ベトナム籍の人ってまだ見たことがないですね。一番早いのは、そういう人がいるってことでしょうね。では、「ベトナムの仲間がいっぱいいるけど、彼らも今度連れてくるよ、イベントやろうぜ」というふうにすると、できそうですよね。最近、ネパールの人まで世の中には増えているといいますから、本当に多文化共生を形にするためのチームづくりというものは、この委員会ではないかもしれないですけど、要りますよね。それさえできて、「やろうや」と言ったら、多分できることが書いてあるんだと思うんです。それを具現化するとき、どういう枠組み、仕組みが要るのかということを考える、本当にやるっていうことが要るのかなと思っています。

6月でしたか、前にこの集まりをやったときに、「そういうことをやりましょうよ」、僕も何か無責任に「やりましょう」と言ったけれど、何にもしてないなど反省してるんですね。本当にやるための枠組みというものが要る。それは、このことを本当にやらなければいけない人、やりたくて仕方がない人、それを実現できるような力のある人、それをどう集めるのか、その人たちが本気になってそのことに対して動き出すということがこのビジョンに備わっていると、このビジョンってすぐ実現するんだろうなという気がしています。ですから、ビジョン自体をどうこうというよりも、ビジョンの担い手のプレーヤーにどう出会うのか、若い人だったら任せていくかということが要るなと個人的に思っています。

いっぱいしゃべりましたが、あと5分ぐらいあるので、皆さんどうぞ。

○川本部会長

山納さん、ちょっとお聞きしたいんですけども、コミュニティ回収ってありますね。そのときに、あっちこっちに本がたくさん出ます。この本を見てたときに近所の人、「この本、読みたいねんけど、こんな本、どっか置いてくれたらありがたいねんけど」って声が出た。そこで、空き家を利用して地域の図書館、勝山だったら勝山連合の図書館を空き家を利用してやりたいなと思ったんです。そのときに空き家の持ち主が分からない、あるいは分かっても貸してくれない、いくらかお金が要るとか、そのお金どうするのかとか、やろうとしたらいろんなものにぶち当たるわけですね。それで、材料、お金、それを誰かが管理して、当番制にして、やってくれる人も地域にいる。だけど、空き家がなかなか利用できないということもあるんですが、どうなんでしょうかね。

○山納委員

多いですね。物理的に空いてるんだけど物理的に。お盆と正月には帰ってくるから、仏壇があるから貸せないという家の話は全国的に聞きます。そんな中でも使えるという物件があって、それを直せるって人がいて、最近で言えば、まちライブラリーという仕組みですね。本を持ち寄って、その本を管理し合うとか、当番制でそこについてるとかいうことはあります。できると思います、本当に使っているという空き家があれば。それをどう説得するのかみたいなことになるんでしょうか

ね、その仏壇の部屋まで使わないからというような話でオーケーなのかとか、みんな多分そういうことをやっているし、廣川さん詳しいんじゃないかなという気もしています。

ありがとうございます。答えになってないかもしれませんが、その壁というのは絶対にあると思いました。

永松委員。

○永松副部長

ありがとうございます。

私いつも区政会議に来ると、一番始めにしゃべることが多いんですけど、一番始めにしゃべると割と損だなと思ってて、皆さんの意見を聞いた後に、「私めっちゃ言いたいことあんねんけど」となるんですよ。なので、今日は最後にマイク回ってきてよかったなと思っているんです。

皆さんの話聞いていて思ったのが、クロッシングフェス、すごい楽しかったし、この先もそういうイベント、生野区でたくさんあると思うんです。

最初のときに区長がおっしゃったように、大正区でも人がたくさん来るイベントがあって、もう来るだけで帰ってしまって、定着にはならなかったというお話をされていて、これは多分これから生野が盛り上がってイベントをすればするほど起こる、同じ道をたどる可能性が高いなとも思ったんです。

いつも思うんですけど、ビフォーアフターを視覚的に見せてくれないと訴求効果って少ないと思ってるんです。なので、既に生野区役所もいろいろアピールしているのを知ってるんですけど、リノベーション、空き家事業をこんなにきれいになりましたの事例とか、そういうのを、それこそイベントのところで展示する。また子育て、こんな学校がありますよ、「こんな学校生活、こどもたちは送っていますよ」みたいな展示のコーナーを常に入れていくというのは一つポイントとして、それこそ住宅販売の業者が座っててもいいと思ってるんですよ、空き家の。実際、いくらぐらいかかるのかリアルを見せてくれたら、こんな面白いことやってて、こんな楽しい雰囲気の良いところに住むということまで直結するので、その場で契約は当然ないと思いますよ。でも、選択肢として印象に残ると思うんです、若い世代に。なので、若い世代が来るイベントを打つのであれば、そこを必ず入れていくようにするといいんじゃないかなと、そしたら空き家もつないでいくことができるでしょうっていうのを、今、皆さんの話を聞いててすごく思いました。ありがとうございます。

○山納委員

時間ですが、まだしゃべりたい人はしゃべりましょう。

○廣川委員

何か楽しくなってきましたね。何かこういうの大好きで。

何かコリアタウンの事例あるのに、ちょっとみんなそれを気づいてないなという。まちの不動産の不動産価値って誰が上げるのかといたら、人なんですよね。だから、地主さんたちの教育の場をつくっても面白いのかなと思う。もう地主さんが自分の空き家っていったところを布石として、一個誰かが音頭取って、自分やってみ

ように思ってやっているんですけど、誰かがそれを布石としてやって、その周辺に人が集まるような環境をつくっていけたらまちの資産も上がるし、不動産価値も上がっていくんだろうな。人の流動をつくれば、そこには価値が生まれるというように感じて思ってる次第です。そこに対して誰がやるのかというのをずっと考えてたんですけど、SNS部隊みたいなものをつくったら面白いのかなという。

何かもがいてる感じの子で、アンテナの張り方は感覚値になるかもしれないですけど、やっぱりちょうどいいのがSNSのフォロワーが1,300とか2,000人ぐらいの規模の子たちって、何かやりたくて自分でアクションを起こしているけど、それがスケールというか、アプローチはできていない子たち、1,000人、2,000人とかってちょうどいい規模なのかなと。バイタリティーとかもあるからそこまで集まる。普通の友達とかだけならせいぜい300から500人ですけど、そのところで誰かが、さっき話させてもらった大人、何か面白い大人たちがもっと増えて、そういう子たちを上手にくくる、囲うわけでもなく、自由な感じで、生野らしく、突拍子もないことをできるようなまちって、これは理想論ですけど、そういうまちになっていったら、一個の拠点からの広がりといったところの、ぼつぼつと輪っかがもっともっと広がってムーブメントになったら面白いのかなという。

さっき、クロッシングフェスの話をさせてもらいましたが、まちが淘汰されていく時代になってるのかなという。大阪市ですけど、地方と同じような感じになっているんだったら、もっと、争うわけではないですけど、ほかのまちと関係人口という、地方のほうなどではよく言われるんですが、その地方に関わってくれる人の数を増やすという、この方法を、都心部かもしれないけど、いずれたどっていくんだろうという、その先を見据えた中で関係人口を増やしていく、そこで関わってしてくれる人たちが口コミで、あのまち面白いよといったところの、口コミは強いのかなと思う。ここら辺は多分3フェーズ先ぐらいの戦略を練ってやらないといけないうのかなとは思っているのですが、そのような形で生野のまちが、この魅力というか、面白いまちだと思えるので、どう呼んでいくか、何か考えていくのが面白いので、みんな考えていたらなと思っています。

○山納委員

ありがとうございます。

あの方、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。ということで、進行にご協力いただきまして、ありがとうございます。

それでは、川本部会長に返したいと思います。

○川本部会長

ありがとうございます。

皆さん、活発なご意見をたくさんいただきました。

今日の会議を見ててもやっぱり担い手は若い人ですよ。私たちではあの発想ができない、柔軟性はない、想像力がない、だからそういう力がない、もう。エネルギーもない。

○杉本区政推進担当課長

それでは、皆さん、お疲れさまでございます。本当に非常に魅力的なご意見いた

だき、ありがとうございます。

本日のご意見については、次の全体会、12月にございますけども、部会として報告いただくことで、ほかの部会の委員の皆様にも共有いただくということになってございます。報告内容については事務局のほうで整理させていただきまして、部会長あるいは本日進行を務めていただきました、山納委員と調整いただきますので、またよろしく願いいたします。

事務局からの報告は以上です。

○川本部会長

それでは、時間も時間ですので、最後、区長さんのほうから。

○筋原区長

皆さん、本日も非常に有意義な、また楽しいご意見をたくさんありがとうございました。少し補足で説明をさせていただきたいと思います。

具体的に私が担い手であるということはどうイメージしているかということなんですが、これは大正区のと時の経験から、空き家で実際にお店をしたい人であるとか、あるいはものづくりのまち工場の方々、これも実際に大正区、港区では、ものづくりのまち工場さんがすごく高い技術力をお持ちですけど、下請、孫請の時代が長かったために、なかなか新製品が、アイデアがないということがお悩みで、一方で、ベンチャーや大学の研究者はアイデアはあるけど形にできないというのがお悩みで、それをコラボして一緒に新製品をつくる拠点として、ガレージ港、ガレージ大正というのをつくって、実際に結構なヒット商品を出したりしました。そういう方々がプレーヤーになると、生野区は、そのポテンシャルがすごくあるので、ぜひガレージ生野をつくりたいなと思っております。

そして、もう一つ、では、イノベーションプロフェッショナルというのは、どのイメージか。これは、大正区で立入禁止の河川敷、堤防ロフトの河川敷に特区を取って、それでクルージングや飲食、物販の拠点、TUGBOAT_TAI SHOというものをつくりました。そういうこともあって、今、大正区の駅前の大正橋商店街は完全復活もしましたし、去年の不動産情報会社の調査では、大正区は若い方の住みたいまちナンバーワンになっております。実際その事業者として公募で選ばれたのが株式会社RETOWNですので、日本ではリノベーション・プロフェッショナルの代表選手はRETOWN。ですので、そのときにすごく思ったのが、そういう新しいことというのは、一旦、見える化しないとイメージしてもらえない。河川敷の活用でもまずは社会実験をして、「そんな臭いところでできるか」とさんざん言われましたけど、でも、やっぱりやってみて、できるのが分かったら、実際にできるということなんです。

今回、クロッシングフェスですね、RETOWNさんともお話をして。僕は、コリアタウンすごいにぎわっていますけど、やっぱり生野区は60か国の方が住んでおられるので、グローバルタウンだと思っております。グローバルタウンは具体的にどんな姿かというと、コリアタウンのようにベトナムやネパールや、またいろいろな60か国のお店がばっと並んだり、そういう拠点ができたり、そういうまちの見える化がクロッシングフェスだったと思ってます。だから、楽しさが生野区のまち全

体に広がっていく。じゃあ、そのとき公民連携の公、行政の役割はどんなのかというと、例えば仮にコリアタウンで夜市をしますとなったら、交通規制で夜、車を止めないといけません。道路を占有します、道路許可が要ります。警察、消防、行政調整っていっぱいありますね。そういうところこそ我々一緒にやってこそ、円滑に進めていくことができるという部分だと思いますし、アイデアや実際の収益部分というのは民間の方々と一緒にすると。

またリノベーションをするには、建築家やデザイナーの専門家の方々が必要ということもあって、そのためのワンストップで相談できる専門家チームを大正・港空き家活用協議会、通称WeCompasというのをつくっておりました。私は、ここ生野区へ来てすごくびっくりしたのが、このWeCompasが必死で空き家活用を手がけて、やっぱりそれは地域愛あふれるオーナーさんを見つけないと、結局なかなかうまくいかないんですよ。年に1件やっとならぬかぐらいいいんです。年に1件ぐらいいいなら、衰退のスピードのほうが早過ぎて負けていったりするんですけど、でも生野区へ来たなら、もう自然に、廣川さんもそうなんですけど、ぼんぼこ、いろいろなリノベーションが実際にできている、自然にできてすごいびっくりしたんです。すごい力があって。だから、既に生野区には力のある専門家、建築家、デザイナー、いろいろな方がおられるんですよ。だから、こういう方々にネットワークでつながっていただいて、空き家の掘り起こしは、またそういう専門家もおられると思うので、僕らも考えますし、空き家の掘り起こしは本当に地域の皆さんの人脈もいろいろとお力添えをいただいてやっていくところになるのかなと思っております。

そして、万博に向けてそういう面白い活動をしていくための、実はEXPOいくのヒートアッププロジェクトというものを今、立ち上げようとしておまして、これは万博に向けて、万博に世界中から集まる人とお金と新技術、これを放っておいたら素通りされるので、それをしっかりと生野区で受け止めようということですよ。万博会場にはバーチャルのパビリオンがありますが、こちらに来たら60か国のリアルの楽しい生活があるので、そのためには、そういう専門家のネットワークであるとか、あるいはお店も、気の合うお店同士がつながって社会実験的にイベントをすることとか、そういうのが万博から生野区へ人を呼ぶという、熱量を上げるという、そういうヒートアップという意味です。そういうのをこれから立ち上げていきたいと思っておりますので、ぜひご参画いただいて、いろんなアイデアをいただいて、それをできるだけ制約なく実現するための環境づくり、行政調整であるとか、そういうところこそ、我々行政がお手伝いさせていただいて、一緒になっていくというイメージで思っています。先ほどのSNS部隊の話も面白かったです。ポータルが必要だと思いますけどね。

それから、廣川さんの共に育む「共育」ってすごくいい言葉だなと思って、ちょっとそれ使わせていただいてもいいですか。これがすごくしっくりくる感じでしたので。という形で、今日いただいたアイデアを、またこれからもアイデアをいただきまして、いろいろなことを、いろいろな面白さを形にしていきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願ひいたします。

本日はありがとうございました。

○川本部会長

どうもありがとうございました。